

児童生徒の自己概念を向上させる体験学習法に関する研究

萩市立須佐中学校 教諭 大木 克行

1 研究の意図

私は、全国に先駆けてOBS（アウトワード・バウンド・スクール）の教育手法を活用した山口県教育委員会の事業であるチャレンジプログラム、クエストプログラムを中心に、これまで様々な体験学習の場にかかわってきた。その際、一番印象的だったのは参加者の生き生きした目である。野外での体験学習がそれを引き出し、自己概念を向上させたと考えられる。C. ロジャースの定義によれば、自己概念とは、「自己を取り巻く外界との関係における自分自身のとらえ方」*¹とある。チャレンジプログラムやクエストプログラムでの体験活動では、体験活動を通して仲間とのかかわり方を学習し、さらにそのグループでのかかわりの中で自分自身と向き合い、自らをよりよくとらえることができるようになっていく。このように自己概念が向上していくためには、グループの構成メンバーの力や、グループを支援するファシリテーターと呼ばれる人の力が大きくかかわっている。これらの力が参加者に働き、参加者の中に自己肯定感やチャレンジ精神が生まれ、徐々に自己概念の向上が見られるようになる。日本国内においても、PA（プロジェクト・アドベンチャー）の教育手法が普及し、人と人がかかわるあらゆる場面において活用されている。PAのような体験学習によって、メンバー同士のかかわりが生まれ、個々のメンバーがもっている力を引き出していくことが、自己概念の向上につながっていくとされている。

ところで児童生徒の現状を見ると、自分に自信がもてない、すぐに自己否定する、できるであろうことも、「どうせできないから・・・。」と言ってやろうとしないなど、自分自身を低くとらえ自己概念が低い状態であることがうかがえる。「自分もやればできる。」という意識は児童生徒のチャレンジ精神を高め、成長していくための重要な鍵になるものである。

そこで、本研究では、体験学習の場で児童生徒の自己概念を向上させている要素のうちファシリテーターの在り方に注目し、児童生徒の自己概念を向上させるためにファシリテーターはどうあるべきか、様々な体験学習の場での実践を通してその在り方について研究することとした。

2 研究の内容

(1) 研究の方法

ア AFPY の活用

本研究においては、山口県独自の体験学習プログラムであるAFPY (Adventure Friendship Program in Yamaguchi)の教育手法を用いた。

AFPYとは世界的な野外教育機関であるOBSや、OBSの教育手法をより身近なものにするためにアメリカでOBSから派生したPAの教育手法をもとにした体験学習プログラムである(図1)。山口県では、10年以上も前から児童生徒等を対象にOBSの

教育手法を活用した長期自然体験活動(チャレンジプログラム・クエストプログラム等)を実施してきており、その活動を踏まえて、より身近な場での冒険教育プログラムとして



図1 AFPY 成立の流れ

AFPY が存在している点に山口県の独自性がある。

AFPY は、グループでの活動を通して一人ひとりの気づきを促し、達成感の積み上げによる自己概念の向上を図ることや具体的な活動を通して相互の信頼関係を深め、他者への思いやりの心を育てることをねらいとしている。

OBS・PA・チャレンジプログラム・クエストプログラム・AFPYのいずれの手法においても、体験活動をより質の高い学習活動に変えていくためのソフトスキルが重要となる。その手法が冒険プログラムによるカウンセリング（Adventure Based Counseling）である。ファシリテーターは、このカウンセリング技法もソフトスキルとしてもち合わせて体験学習の場でグループにかかわり、参加者から体験からの気づきを引き出し、グループのメンバーの感情交流を促していく。

イ 体験学習サイクルの活用

体験学習サイクルとは、体験を通して参加者の気づきを引き出し、その解釈から学びを深めて、次の行動へと生かしていく学習過程である。体験学習サイクルの考え方では、ただ体験をするだけでなく、体験を振り返り、その意味を考え、そこから何を学ぶのか、その学びを何にどう生かすのかを考える作業が非常に大切である（図2）。

この体験学習サイクルの循環を円滑にするためには、「心の安全」が保障された環境が不可欠である。「心の安全」とは、

自分が感じたことを素直に伝えて、受け止めてもらえるという安心感をもてることをいう。つまり、いろいろな体験学習の場において、決して、本人にとって無理な活動（体力的・心理的に）を、ファシリテーターも含めた周囲のメンバーが無理強いしないこと、否定的な発言などでグループのメンバー同士が中傷し合わないこと、いろいろな場面において、プレッシャーをかけないこと、そういったかかわりをグループ内に作り出していくことが大切である。

このようにして「心の安全」が保障された環境では、気持ちがオープンになり、人の話に耳を傾け、自分の思いを伝え始め、「学び」や「気づき」が生まれる。自己概念の向上のためには、グループのメンバーが肯定的なかかわりをする中で感情を交換し、自分の気持ちと向き合うことが大切になる。

心理的な緊張を取り去っていくことは、プレッシャーをかけるよりも、自己への気づきや自分に対するイメージの改善にはるかに有効であると言われている。このため、体験学習サイクルの活用においては、この「心の安全」を一番大切にしていきたいと考えた。

ウ 自己概念を向上させる実践において大切にすること

自己のとらえ方は、周囲の環境、特に人と人とのかかわり方によって大きく左右されると考えられる。つまり、人と人が安心してかかわれる場面で、自分を出し、それを受け止めてもらい、認めてもらい、フィードバックしてもらい、自分の中に起こる感情の変化を通して自己と対峙する時に、自分のイメージやとらえ方が変化してくる。

そうした環境をプログラムにかかわるグループの中に作り上げていくことが、ファシリテーター

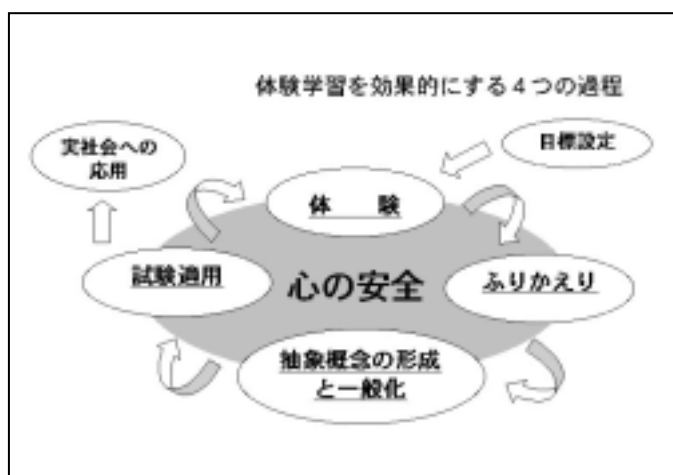


図2 体験学習サイクル

として重要な役割となり、この環境を作り出しプログラムの参加者が体験活動で達成感を積み重ねていくことができるならば、プログラムの参加者は自信を大きなものとし自己概念が向上すると思われる。

したがって、児童生徒の自己概念を向上させる体験学習法について実践・検討していくにあたり、心が安全でいられる環境を作り出すこと、体験学習への参加者の意志や感情を最大限尊重すること、そして、適切な目標設定を支援し達成感を得られる活動を仕組むこと、最後に、活動を終えての振り返りを充実するように努めることを大切にしていきたいと考えた。

エ 実践の場

体験学習は、野外活動の場から学校教育の場まで、児童生徒が存在する様々な場が挙げられる(図3)。よって、実践においては、野外での体験活動のみならず、学校行事における青少年教育施設での実践や、不登校児童生徒支援事業での実践も含め、野外から学校まで幅広い場において、前述のようなスタンスで児童生徒にかかわることとした。

- ・ **野外での長期自然体験プログラム**
心の冒険サマースクール
- ・ **青少年教育施設の活用**
十種ヶ峰野外活動センター
国立山口徳地少年自然の家
- ・ **不登校児童生徒支援事業**
ほっとひといきディスカバリー in 十種ヶ峰
- ・ **学校**

図3 実践の場

(2) 実践事例

ア 野外での長期自然体験プログラムを活用した実践事例

心の冒険サマースクール(チャレンジプログラム・クエストプログラム)には、OBSの教育手法が用いられ、実施期間中の各コースには、参加者の自律性や協調性が徐々に高まるように段階的にフレーズを設定し(表1)、様々なプログラムを配している*2。

表1 OBSプログラムの構成とOBS的観点

準備期 (トレーニング・フレーズ)	遠征期 (イクサ・チャレンジ・フレーズ)	内省期 (ソロ)	自立期 (アウト・イクサ・チャレンジ・フレーズ)	再出発期 (リスタート・フレーズ)
野外生活のための知識や技術を習得するとともに、集団生活への適応を促すように指導する。	長時間の移動や冒険的なプログラムに挑戦することにより、グループ内の協力関係や達成感が飛躍的に向上する。このフレーズから、指導者はできるだけ直接的な指導を控え、参加者の自律性が高まるように配慮する。	寝食行動を一人で行い、孤独と戦いながら、生きている実感を味わう。このフレーズは、それまでの共同生活を振り返り、家族や仲間との関係や自分自身について深く内省する機会となる。	このフレーズでは、指導者は極力同行することなく、グループの責任と信頼による実践に任せる。参加者にとって、まさに冒険と覚醒の日々となる。	活動の総仕上げを行うとともに、これまでの体験を振り返り、これを内面化して、日常生活への新たな旅立ちの準備をする。

そのクエストプログラムでは、ソロ(次ページ図4)という山の中で寝食行動を一人で行い、家族や仲間との関係について深く内省する場面が設定されている。この活動の中で、参加者の一人、高校2年生Aさんがこれまでの自分を振り返り、1年後の自分に宛てた手紙に見られた自己概念の変容について紹介する(次ページ図5)。



図4 ソロの様子

Aさんは、自分が変わるきっかけを求めて、自らクエストプログラムに参加した。ソロのプログラムに入るまでに、グループでのサイクリングや山歩きを体験してきた。野外炊飯等すべてのプログラムにおいて、グループの自己決定が尊重されるOBSスタイルのキャンプでは、常に仲間との合意形成が必要なためミーティングをもつことになる。この場で、グループのメンバーの考え方に触れ、新たな自分に気付き、仲間と積み上げてきた達成感がAさんの心に支えてくれる仲間の温かさやチャレンジ精神、みんなで乗り越えていくことの楽しさ等を感じさせてきたようである。

1年後の自分へ

僕がクエストプログラムに応募した理由覚えてる？高2の頃、いや高1くらいからかもしれない。結構気持ち不安定だった。その時、緑の紙が目にとまったんだ。進学校に入ったのはいいけど、成績は下だし、特に何をやってもうまくいかなかったことが多かったような気がする。

でも今はいろいろなことを教わったような気がする。まだ気持ちの整理がついていない。しかし、今の僕は1年後の自分が楽しみである。それだけは確かだ。高校生活もあと1年半。これからどう変わっていくかは分からないが、悔いの残らない道を歩むことを祈っているよ。

これから先、いや今つらいことがあったら言うておくよ。辛いとき、苦しい時こそ本当に人の真価が問われる。実際、山は高ければ高いほど山頂の眺めはいいし、山ができれば谷ができ、谷ができれば山はできるものさ、だから途中で投げ出すのはやめてほしい。それでも人を信じることができなければクエストの仲間と相談すりゃいいだろう。きっと元気付けてくれるよ。

図5 ソロ中に書いた手紙

Aさんが1年後の自分宛に書いた手紙の中では、クエストプログラムに参加する前の自分の気持ちに比べ、プログラムに参加し仲間とのかかわりを通して、自分を見つめ直し、自分を価値のある存在と認め前向きに頑張ろうと意識が変容したことがうかがえる。Aさんは、この手紙の文面だけでなく、プログラムに参加している間、自分自身のとらえ方が変化するに伴って、仲間への手助けが積極的になったり、何事にも進んでチャレンジするようになるなど、行動面においても変容が見られた。

イ 青少年教育施設を活用した実践事例

山口県にはプロジェクト・アドベンチャーの冒険プログラムを実施するために、独立行政法人国立山口徳地少年自然の家と十種ヶ峰青少年野外活動センターにエレメントと呼ばれる施設が設置されている。その多くは丸太やワイヤーなどを使って立てられており、意図的計画的に冒険活動を行える施設となっている(図6)。どの活動も参加し



図6 島巡り

たグループの全員が協力しないと解決・達成できない内容になっている。近年になって、山口県ではP AやAFPYの手法が広がりを見せ、県内の様々な学校が集団宿泊のプログラムの一部にこの施設を使った体験学習プログラムを取り入れることが多くなってきている。

そのエレメントの中に、パンパーポール・ブランクという活動がある。この活動は、高さ9メートルのプラットフォームに立ち、仲間たちの握っている命綱を身に付け、目の前の目標のバーに向かって踏み切るといったものである(図7)。この活動を終えて、中学1年生Bさんはこのような感想を書いた(図8)。

最初、Bさんはプラットフォームに登るといった目標を立て、それをメンバーに断言してチャレンジを始めた。高い所へ登るのがただでさえ怖いようで、登る最中にも何度もあきらめかけたが、同じグループの仲間の励ましで、高さ9メートルのプラットフォームにやっと登ることができた。Bさんはこの時点で目標を達成したのだが、さらにプラットフォームから飛び降りることに挑戦した。この活動にたどり着くまでに、「心の安全」が確

保された環境の中で仲間との肯定的なかかわりを重ねてきたBさんは、グループのみんなが支えてくれているということを感じ、声かけに勇気付けられ、さらなるチャレンジをしようと思い、プラットフォームから飛び降りる挑戦をしたのである。

この感想の文面から、自分の目標設定に対してそれを達成した時に「自分もやればできる」という自信をつかむことができたことに加え、みんなの励ましがあって、次の新たな挑戦をしようという決意に至った様子が見受けられる。活動の目標レベルを自己決定し、そして、それが達成されたことで、やればできる自分に気付くことができた様子も見受けられる。また、それに加え、「心の安全」が守られたグループの肯定的なかかわりが、Bさん自身のとらえ方に良い影響を及ぼし、新たなチャレンジをする力を生み出したと考える。

ウ 不登校児童生徒支援事業における実践事例

山口県教育委員会では、今年度より不登校児童生徒支援事業として十種ヶ峰を拠点とする年間20回の事業を実施してきた。この企画は「ほっとひといきディスカバリー in 十種ヶ峰」という事業で、年間を通じて体験活動の機会を用意することにより、不登校傾向にある児童生徒の「自信」と「社会性」の回復を支援するものである。この事業では、不登校傾向にある児童生徒の心は疲れているという仮定のもとに、心がほっとできる場所を提供することを目的としている。また、太陽が出て沈むという自然のリズムに合わせて自然の中で心を休め、参加者の好奇心がふく



図7 パンパーポール・ブランク

中学1年生Bさん

「登るのが精一杯でもうやめようと思った。」

「みんなが励ましてくれたので、
跳んでみようと思った。」

「みんながロープをちゃんと持っていてくれたので
私も飛び降りることができた。」

図8 活動を振り返っての感想より

らみ挑戦意欲が湧くような、日常ではあまり取り組めない種類の体験活動メニュー（山歩きや、野外炊飯、サイクリング、カヌーツーリング等）をふんだんに用意し、結果として達成感や感動が生まれるように仕組んでいる（図9）。この企画に複数回にわたって参加した中学1年生Cさんの言動に見られた変容の様子を紹介する（図10）。



図9 カヌー作りとカヌーツーリング

中学1年生Cさん

「自分はどうでもいい人間。いつ死んでもいい。」

「ここに来ると一人であることの不安を解消できる」

「みんなといることが楽しい！ また来たい！」

図10 Cさんの言動の変容

最初の頃は、「ぶっ殺す」、「切れたら何するか分からんぞ」など、粗暴な言動がとても多かった。自分に対するイメージ（自己概念）がたいへん低く、「自分はどうでもいい人間」とか「いつ死んでもいい」などと言う場面も、かなり見受けられた。活動自体も「できればさぼりたい」、「めんどうだからやりたくない」と、避けているところ

が多かった。「自分でできることを自分で選んで参加すること」を大切にしたことや、「みんなと一緒にここにいる時には、これをしないといけない・・・。」という雰囲気スタッフがつくらなかった。それによりCさんは、「このメンバーの中に身をおいていてもいいんだ・・・。」という心の居場所を感じるようになった。そして、自分ができそうな活動には自分から挑戦するようになり、徐々にみんなと一緒に活動ができるようになった。体験活動の振り返りの場で、結果よりもチャレンジしたこと自体を高く評価されたり、Cさんの言動が支えになったことを他の参加者から伝えられたりすることで、自分のいろいろな面に気づき、他者の感情に触れ、Cさんは自分と向き合うことができるようになった。Cさんは何度か一緒に活動をしていくうちに、「十種ヶ峰に来て、みんなと一緒に活動することで、一人であることの不安を解消できる」と話をしてくれるようになった。そして「みんなといることが楽しい、また、来たい！」というようになった。

自分自身を低くとらえていたCさんは、みんなが肯定的にかかわり、活動に参加したことを認められることで居心地のよさを感じ、徐々に自分を出せるようになったと思われる。それとともに、自分の存在価値を見出し、自分自身を価値ある存在だととらえることができるようになった。

エ 学校における実践事例

学級経営に際して、生徒同士がよりよくかかり合うために必要な、意思疎通、感情表現、自分

の感情の処理能力の向上をめざして、1年を通していろいろな場面をとらえ、体験学習の場を設定し活動を行ってきた。体験学習は、学級活動や道徳の時間を中心に実施したが、学級経営・教科学習全般、日々の生活の中にもAFPYの活動を意図的に仕組み、その活動を通して生徒達が感じたことを振り返りの場で引き出し共有してきた。これらの活動(図11)を通じて見られた中学1年生Dさんの変容の様子を、活動後の感想(図12)から見てみたい。

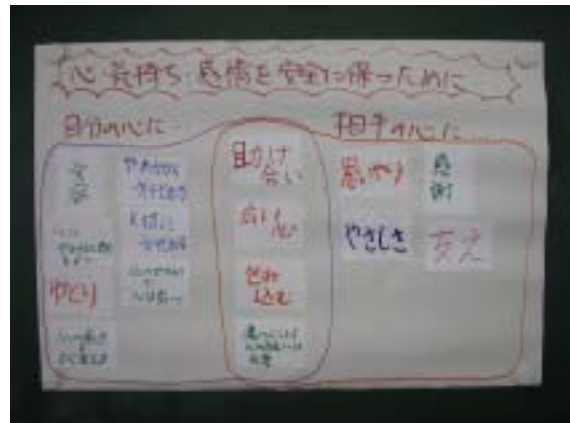


図11 タマゴを心と感情にたとえ、その取扱いについて考える(保護者も一緒に)

中学1年生Dさん

「やっぱり人は、それぞれ違うなあー。」
 「この時間、感じたことは、積極的にやる、人に合わせる、協力する、自己中心的にならないです。」
 「人の気持ちを読むことなどをして、また更にこの1年の一体感が生まれたと思います。」
 「言葉でいえないことが『こんなに苦しい』とは思いませんでした。僕は言葉の大切さが分かりました。」

図12 様々なAFPYの活動を体験したDさんの感想から

この感想から、クラスの仲間とかかわり、新たな自分に気付くことができたことがうかがえる。それと同時に他者のいろいろな考え方や感情に触れることで、同じ事をして、人それぞれ感じ方が違うことに気付くことを通して、他者に対する思いやりをもてるようになってくるなどの変容が見られた。最初はかなり引っ込み思案なところが多く、活動にも消極的なDさんだったが、学校行事などにも意

欲的に取り組むようになった。

こうしたことから、クラスの仲間たちの考えや感情に触れ、自分がどうあるべきかを常に考えて行動してきたこと、そして、何かをする時には、一緒に活動してきた仲間にかかわりや支えができたことで、それが自ら一步を踏み出す原動力になってきているように見受けられた。また、それが積極的に行動できるようになったことは、自分自身のとらえ方が向上したと考える。

(3) ファシリテーターの在り方

AFPYの指導実践を進める中で、児童生徒の自己概念の向上に対して、グループの状況が大きな影響を与えていることが分かってきた。様々な実践を通して見られた児童生徒の変容の様子から、

「一人ではできなくても、仲間となら越えていける。」という成功体験を積み重ねることで、児童生徒一人ひとりの中で自信が生まれ、「自分も人の役に立てる。」「思ったよりがんばれる。」という意識がもてるようになってきた。このような意識は、グループでの活動によって生まれていくのである。したがって、ファシリテーターには、グループの指導に関して次のような役割が求められる。

ア グループの状態を的確に把握

グループの状態とは、人数、学習意欲、学習動機、行動レベル、感情のコントロールの度合い等である。状態の把握が不十分であれば、活動場面でグループとそのメンバーは心理的な危険をはらむことになる。参加者の心身両面の安全確保はファシリテーターとしての最優先事項である。自己概念の向上のために私が大切にしてきた「心の安全」を保つためにも、グループの状態把握は必要である。

いろいろな活動において、ファシリテーターはグループの状態を把握するために、児童生徒の表情、位置関係、言動等、かかわるグループに細心の注意を払い、今何が起きているのか、ほんの些細な情報であってもつかみ取る努力を続ける必要がある。これらの情報の積み上げが、効果的な活動を組み立てるための材料ともなってくるし、振り返りのときに児童生徒が活動から得た学びや気づきを引き出すための問いをつくる材料ともなる。

イ 適切な目標設定

AFPYの活動では目標が設定され、その達成をめざして、個々の活動が綿密に組み合わせられる必要がある。個人及びグループの目標は測定可能であり、進行状態が分かるものであり、達成可能であり、具体的であることが求められる。そして、目標設定、活動、振り返り、再試行、目標達成という体験学習サイクルの一連の流れをさりげなく支援しなければならない。この目標設定をしっかりとさせておくことは、自己概念の向上のために私が大切にしてきた、達成感が得られる活動を仕組むこととも深く関係している。

ウ 意志や感情の尊重

ファシリテーターは常に個人とグループの意志や感情を最大限に尊重すべきであると同時に、グループのメンバー同士が肯定的にかかわれるようにすることが重要である。このため、感情の変化を共有できる場を提供することにより、メンバー同士のかかわりを徐々に深めることが大切である。グループの感情や意志を最大限尊重することは、ファシリテーターとしてグループの中に「心の安全」を作り出すことにも貢献している。心身の安全を確保し、参加者の感情や意志を尊重した活動を展開していくことにより、参加者の自己概念の向上を図ることができる。

エ 振り返り

活動が終了した後は、様々な振り返りの方法を活用することによって、自己への気づきを促すことができる。また、ファシリテーターの発問による参加者の気づきの発見とともに、グループのメンバーとともに振り返りを行うことで、気づきを促し、他者の感情に触れることができる。この場における気づきとグループのメンバー同士の感情交流が、自分の気持ちと向き合った時に、自分のとらえ方が変わるきっかけとなる。そして、次からの活動において、行動変容を起こすきっかけとなる。

(4) 自己概念の向上と主体的な学び

たくさんの指導実践から、ファシリテーターとして効果的にかかわることで体験学習をより効

果のあるものに変えていくことができることを再認識することができた。前述したファシリテーターの在り方は、児童生徒の自己概念の向上にとって非常に大きな要素であることも実感できた。ファシリテーター的視点をもち、児童生徒の自己概念が向上するように、グループにかかわることで一人ひとりの自己概念が向上していく。それに加え、個々の自己概念の向上が、グループ内でお互いに肯定的なかかわりを生み出し、相互に自己概念の向上をもたらすことも分かった。

これまでのたくさんの実践から、自己概念の向上は生きる力や学ぶ意欲と大きな関係があると感じている。自己概念を向上させるファシリテーターの在り方として、心が安全でいられる状態を意図的に作り出すことで、グループのメンバーは居心地の良さや楽しさを感じ、徐々に自分を出すことができるようになる。そして、それがグループのメンバーの肯定的なかかわり方によって、お互いを受け入れ、認めることで、自己概念は向上し、自信を大きなものとし、意欲ややる気をもつことができる。そして、自己概念が向上しさらに肯定的

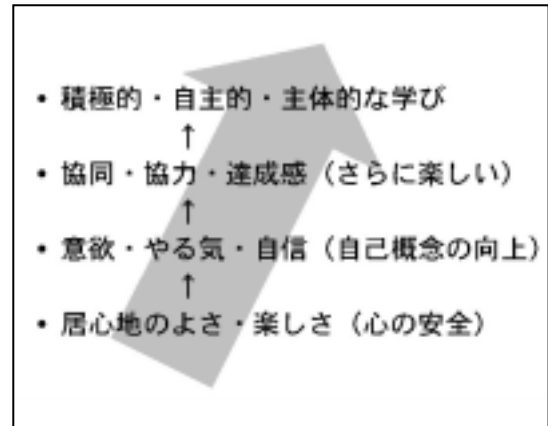


図13 自己概念の向上と主体的な学び

的にかかわることができるグループに成長してくれば、みんなといろいろなことをやり遂げる力が生まれ、協同・協力ができるようになり、より困難な課題を解決する力が生まれ、大きな達成感を得ることができるようになる。体験学習サイクルを繰り返し体験していく中で、グループは成長していき、さらに難しい課題に対して、協力し解決していく力を身に付けていくと考えられる(図13)。自己概念の向上から生まれる意欲や主体性が、学校で児童生徒が生き生きと活動し、学ぶことができる原動力となっていくのである。

3 まとめと今後の課題

(1) ファシリテーター的視点をもつことの重要性

本研究を通して体験学習法の構成要素のうち、ファシリテーターの在り方が児童生徒の自己概念の向上にとって非常に大きな要素であることが明らかになった。そして、個々の自己概念の向上がお互いに肯定的なかかわりを起こし、グループ内に相乗効果をもたらすことも分かった。

AFPYの教育手法の実践を通して強く感じることは、その体験をさせること自体というよりも、感じさせたいことを体験活動の中に意図的に仕組むこと、そして、それを言葉で伝えるのではなく子どもたちに気付かせることである。つまり、目の前にいる子どもたちをどのようにとらえ、この子どもたちにどうかかわっていくかという自分自身の立場や在り方こそが大切なことである。

ファシリテーターに求められる条件は、教員にとっても必要不可欠であり、体験学習法の考え方、進め方は学校教育のあらゆる場面で既に活用されている。ファシリテーターの視点をもち、ファシリテーターとして効果的なかかわり方ができるようになれば、子どもたちの望ましい変容が期待できる。子どもたちの自己概念の向上をめざすためには、ファシリテーター的な視点をもち、子どもたちにかかわることができる教員になることが必要だと考える。

(2) 学校での実践の充実に向けて

これまで、様々な場所で実践を重ねてきたが、決して特別なことをしなければ自己概念は向上しないというものではないことが分かった。日々の学校の中での取り組みでも、「今、子どもたちがどんな状態にいるのか、そしてどんな感情をもっているのか、この活動にあたって目的意識や目標をどれくらい自分のものとしてつかんでいて、現実に達成することができるものなのか、そして、活動するにあたって意志や感情は最大限尊重されているのか、活動から何を感じ、考えたのか、子どもたちの様子を意識し、ニーズはどこにあるのか」を常に考え、適切な投げかけや発問で気づきを促していくことで、自己概念を向上させることができると確信できた。そしてこれらの力は実践を通して養われていくものである。

山口県には、十種ヶ峰青少年野外活動センターのように、青少年教育施設が充実している。山口県は、子どもたちの心の教育に絶好の機会と場所に恵まれておりこれらを積極的に活用していくことが望まれる。また、AFPYの教育手法が全県に広がりつつあり、ファシリテーター的視点をもつことの大切さを感じている教員が徐々に増えてきている。学校現場で、ファシリテーターの在り方の必要性を理解し、ファシテーター的な視点をもって子どもたちにかかわることができる教員になること、そして、そのような教員が増え、子どもたちとかかわっていけるようになることが、生き生きとした児童生徒の育成、そして生き生きとした学校づくりにつながると信じ、今後も実践を重ねていきたい。

【引用文献】

*1: ディック・ブラウティ他 『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』 みくに出版 1997 p13

*2: 山口県教育庁社会教育課編 『平成15年度青少年自然体験活動推進事業報告書「チャレンジ&クエスト」』

山口県 2004 p61-62

【参考文献】

ウィリアム・J・クレイドラー他 『対立がちからに』 みくに出版 2001

堀 公俊 『問題解決ファシリテーター ~ファシリテーション能力養成講座から』 2003

田中熊次郎 『グループセラピー』 日本文化科学社 1987

諸澄敏之 『よく効くふれあいゲーム119』 杏林書院 2001

津村俊充・石田裕久編 『ファシリテーター・トレーニング』 ナカニシヤ出版 2003

トーマス・アームストロング 『マルチ能力が育む子どもの生きる力』 小学館 2002

マリアエナマ・ウィリス他 『あなたの子供にぴったりの「学習法」を見つける本 5つの「ラーニングスタイル」で個性を伸ばす』 PHP研究所 2001

藤村 寿 いつでもどこでもだれでもできる仲間づくりに関する研究 -Adventure Friendship Program in

Yamaguchi (AFPY)の活用をめざして- 『平成14年度調査研究事業(単独研究)』 p231-236 山口教育研修所 2003

竹林嘉代 生きる力を育む体験学習に関する研究 AFPY導入の試み -

『平成14年度長期研修教員報告書』 p253-266 山口教育研修所 2003

白金聡美 体験学習におけるファシリテーションに関する一考察

『平成15年度長期研修教員報告書』 p43-56 山口教育研修所 2004